

正しくわかるという性格のものであるため、デモンストレーションは極めて重要である。最近のSIGGRAPHのEmerging Technologiesなどでも日本のVR関係研究機関からのデモンストレーションでの活躍が顕著であるが、今回のResearch Demonstrationsでも、日本のVR系デモのレベルの高さを、諸外国の参加者に再認識させることができたのではないかと考える。

貴重な研究成果をデモンストレーションとして見せてくださった方々、会場の調整などにご協力いただいたExhibits担当の伊藤一男様、澤田一哉様、その他、関係の皆様感謝いたします。



Exhibits & Research Demonstrations

## ◆出版担当

### 竹村治雄

大阪大学

出版担当としての業務は、事前プログラム、ファイナルプログラムの作成と編集、プロシーディングスの出版社選定と編集業務の橋渡し作業が主な業務である。これらについて、作業内容を簡単に紹介する。

まず、事前プログラムおよびファイナルプログラムに関しては、VR2000ではIEEE CS Pressが編集作業を行ったようであるが、アメリカで印刷して日本に輸送する時間差を考慮するとCS Pressは使用できないとの結論になり、CS Pressから昨年のDTPデータのみ貰い受けて国内での編集と印刷を行うこととした。尚、DTPデータはQuark Express（英語版）を利用して作成されていたので、新たに同ソフトウェアを購入して作成した。またDTPデータはVR2002の委員会にも引き継ぐ予定である。尚、プログラムは今回のカンファレンスカラーであるグリーンと黒の2色刷りとした。

次に、プロシーディングスの出版であるが、IEEE Computer Society単独での開催ではComputer Society Press（CS Press）がプロシーディングスを出版している。今回もVR

学会側での出版のための体制がまだ整っていないことや、英語での出版であることを考慮してCS Pressに出版費用の見積もりを最初に依頼した。その結果、アメリカからのプロシーディングスの輸送費用を考慮しても十分魅力的なコストでのプロシーディングスの作成が可能であることがわかった。また、CS Pressでの出版であれば、IEEEのDigital Libraryにも自動的に登録され、事後のプロシーディングスの流通も良いことを考慮した結果、出版をCS Pressに全面的に委託することとした。委託に関する契約は、CS PressとPublication Chairとの間で8月に交わした。その後、採択論文が決定されると著者とのやり取りはCS Pressが直接担当し、PostScriptファイルによる原稿の受け渡しが行われ、非常に効率よく編集作業が進んだ。出版担当の業務としては、各チェアからプロシーディングスの序文の原稿の収集、論文掲載の順序、各委員のリストのCS Pressへの引渡し、最終的な編集結果の確認等を行った。

ただ、残念なことにパネル討論のセクションに掲載されるはずであった、各パネリストのポジションペーパーの原稿が、CS Press側のミスで掲載されず、パネル討論のアストラクトのみの掲載となってしまった。この点については、CS Pressも責任を認めているが、ミスが判明したのが印刷終了後だったため、修正ができなかった。CS Pressの話では、Digital Libraryへは正しいものを掲載することである。関係者各位には改めてお詫び申し上げます。

## ◆WEB担当

### 野間春生

(株)ATR 知能映像通信研究所

IEEE-VR2001の実質的なフロントエンドであるWeb関連の業務の全般をWEB Chairとして東京大学の稲見氏と共に遂行いたしました。

昨今のネットワーク状況と、本会議自体が初めてのアメリカ国外での開催と言うことで、当初から論文投稿、査読、参加受付の全ての処理をWebにて行うことが決定されておりました。しかし、大きな会議のようなプロによるシステムではなく、あくまで私たち実行委員のお手製のWeb環境での運営が前提であり、これを受けてWeb Chairではwww.vr2001.orgのドメインを取得し、東京大学内にサーバーをおきつつ、これを東京大学とATRよりメンテナンスする環境によって運営いたしました。運営中に不具合や誤記の指摘を何かと頂きつつも、論文受付・査読で

は“IEEE VR 2001 & INTERACT 2001 共同電子投稿・査読システム開発プロジェクト”の成果を利用し大きな混乱無く300件以上の投稿を処理することができ、またこれを転用した参加受付システムも当日まで不具合なく運用できました。結果的に400名程の会議参加者に対して、現在までに28000を越えるページビューを頂き、無事に与えられた使命を遂行いたしました、ほっとしております。

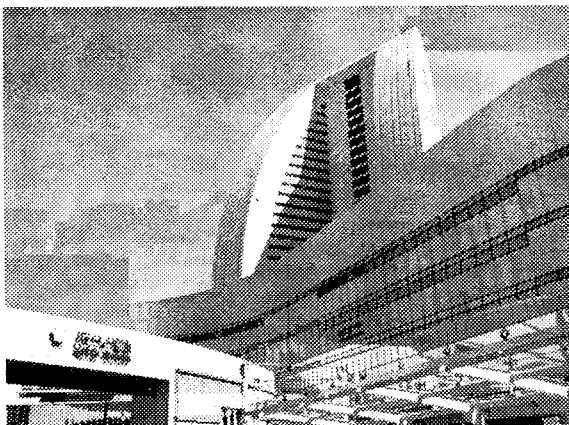
## ◆ Local Arrangement 担当

田村秀行

キヤノン(株)

国際会議に相応しい場所であることと ISMR 2001 (複合現実感国際シンポジウム) との同時開催による相乗効果を期待して、横浜市での開催が決定された。会場となったパシフィコ横浜・会議センターは、首都圏の3大コンベンション施設の1つであり、資金面を除いては、会議施設・宿泊施設ともに国際会議には申し分のない環境であったと言える。

街全体が観光都市であり、また周囲の「みなとみらい21地区」がモダンな商業施設であったため、英文でのマップを用意するだけで、特別な観光コースを用意する必要がなかった。宿泊施設間での値引き競争に折りからの円安も手伝って、高品質のホテル宿泊が格安の価格で提供でき、外国からの参加者に高い満足度を与えることができた。



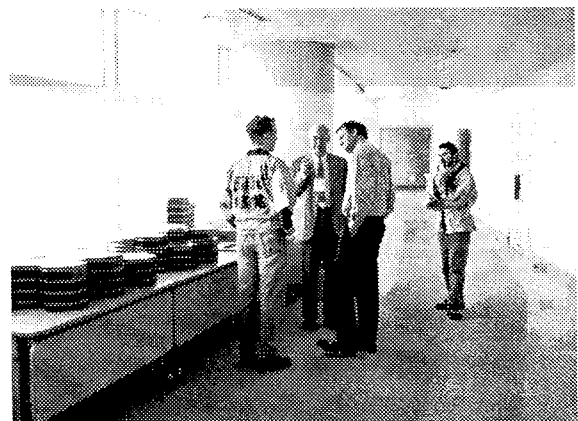
同じ会場内で ISMR-2001 と MiRai-01 (MR プロジェクト研究成果発表会) が開催され、マスコミの注目度もアップした。海外からの IEEE-VR 参加者が ISMR/MiRai-01 のデモ予約コーナーに列をなし、両国際会議をクロスした当日参加登録者が予想以上であったことから、イベントコンプレックスの相乗効果があったと考えられる。

## ◆ 学生ボランティア担当

横小路泰義

京都大学

IEEE-VR ではこれまでも学生ボランティアを募集し、レジストレーションデスクでの受付業務補助、会場入り口でのバッジチェック、会場内での AV 機器操作、クローカ業務等々多岐にわたる業務を彼らに任せてきた。ここ数年来は、会議開催地の地元学生には10時間以上の業務を条件に会議参加費等が免除となる特典を与え、地元以外の者には20時間以上の業務を条件に旅費・滞在費の補助として400米ドルを支給していた。今回は初めてのアメリカ国外での開催ということで、これまで大半を占めていたアメリカ国内学生の応募がかなり減るであろうとの予想から、支給金額を倍の9万円に引き上げた。最終的には海外からの20時間枠の学生7名(アメリカ、カナダ、ノルウェー、ブラジル)、10時間枠の学生28名(日本人学生および日本在住の外国人留学生)、合計35名がボランティアとして参加してくれた。ワークショップやチュートリアルも含めて5日間の会議期間であったが、仕事をしていくうちに徐々にお互い打ち解け、ボランティア学生は参加したことに皆満足してくれたようであった。会議に参加された方々も緑の法被を来た彼らの各所での働きぶりを覚えていただいていることと思う。最後は、会議終了後の横浜中華街で学生ボランティアだけのパーティー(飲茶食べ放題!)で締めくくった。



はっぴ姿の Student Volunteer